

一人ひとりの学習意欲や学習集団としての意識の向上を目指す授業の在り方  
一個の学びと協働的な学びのつながりを活かした学習活動の工夫を通して一

鈴木 諒香  
教育方法開発コース

## 1. テーマ設定の理由

中央教育審議会答申(令和3年1月)では、令和の日本型学校教育を担う教師の姿として「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」としている<sup>1)</sup>。そのため、学校教育では確かな学力を教え込むのではなく、個々の児童の実態に応じた柔軟性のある指導をしていくことが求められている。さらに、少子化に加え、コロナ禍で他者とのコミュニケーションに制約がある現状において、他者と励まし合ったり、自分とは異なる他者の考え方に触れて新たな気づきを得られたりする学習がこれまで以上に重要な意義をもつといえることから、子ども達が好奇心をもち、最後まで粘り強く理解を深めたいと思える授業や他者と協働することで問題を解決する達成感を感じ、他者との信頼関係が生まれるような授業が求められていると考えた。昨年度の実践では、「一人ひとりの学びを活かす子ども理解に基づく授業づくり」をテーマに研究を行い、個々の児童の学習状況の理解、それに応じた個の支援と新たな気づきを得られるような協働的な学びを同時にしていくことで、より主体的・対話的で深い学びの実現を可能にできると確かめることができた<sup>2)</sup>。本研究では、昨年度の成果と課題を踏まえ、子ども達の学習意欲の向上に焦点を当て、どのような方法が学習意欲の向上へと効果があるのか検討していく。さらに、コミュニケーションを重点に置いた外国語の教科の特性を生かして、子ども達が相互に高め合えるような授業を目指し、本テーマの設定に至った。

## 2. 基本的な考え方

櫻井によると、達成したい目標に向けて行動しようとする力である動機が知的好奇心の探求や自己の成長といった自己実現のために学ぼうとすることを自律的な学習意欲という<sup>3)</sup>。また櫻井は、それを支えるものに①有能感②自己決定感③他者受容感の3つの要素が関係していること<sup>4)</sup>から、学習意欲が向上する授業には、「子ども達が自ら自信をもち、自分の能力を伸ばすことができると感じられる活動、仲間と協働で学び合う活動、自分で見通しをもち選択できる学習の機会などの学習場面」が求められると筆者は考えた。加えて櫻井は、「自分の学習状態を自分の外側からみて、その状態を理解したり調節したりする働きや能力」であるメタ認知が学習意欲に大きな影響を与えていると述べている<sup>5)</sup>。そのため、学習意欲を発現するための授業には、学習者が自身の学習に対して能動的に向き合い、学習目標の実現に向かうプロセス全体の中で自身の学習を客観的に見直したり、調節したりする時間を設定していくことが必要であると考えた。

さらに、それを実現させるためには仲間との信頼関係を築き、誰もが発言しやすく受容的で温かな学習環境にするための学習集団の意識の育成が条件になると考える。秋田・坂本は、教育課程の質について「学級として子ども達の間でどのような関係が形成され、相互に承認し合い相手の人権

を侵害しない集団としての連帯や結束力が生まれているかという点と、教師と子ども個人間の関係の両方の関係性が、授業で学習に参加しようとする意欲への前提となる居場所感や安心感に影響を及ぼす。」と述べている<sup>6)</sup>。このことから、集団での発言のしやすさ、発言内容を受け止めてもらえる安心感や居場所感に加え、みんなで夢中になり共通の目標に向かって高め合いながら学ぶことができるような集団を形成していくことが、より質の高い学習を目指すうえでの土台となり、一人ひとりの学習経験としてその後に生きていくのではないかと予想を立てた。

### 3. 実践の概要

本研究で実践した単元は小学校6年生の外国語「Unit 6 Let's go to Italy」で、自分の行きたい国やその理由を紹介する表現や文構造を理解し、最終的に自分が行きたい国について友達と発表し合うという活動展開である。下の図は、筆者が考える学習意欲の形成プロセスを図式化したものである(図1)。以下に①から⑤までの手立てと授業での実践方法の概要を示した。

#### ①メタ認知能力の育成に効果的な振り返り

児童が学習の振り返りを授業後に書いて終わるのではなく、その振り返りをもとに次時の学習に向けて各自の目標を設定できるような振り返りを毎時間行うことで、自己の変化に気付きやすくなり、学習に対する価値を見出して意欲を高め続けていくことができるのではないかと考えた。毎回の授業では、児童が単元全体の活動を見通しながら次時に対する自己目標を設定し、それに対する振り返りが連続的にできるような振り返りシートを活用した。

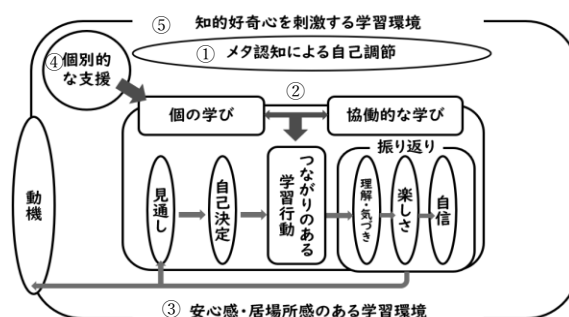


図1. 筆者が考える学習意欲の形成プロセス

#### ②個としての学習を活かし協働的な学びに進められるような活動や教材の工夫

前回の研究を通して、個の学習と協働的な学習の接続を図ることによって児童の主体性を育むことができるようになった。授業では、「My dictionary をつくろう」と題して自分が知りたい英単語とその意味を調べる活動を行った。授業後には、「Our dictionary」として自分が調べた単語を付箋に書いて模造紙に貼り付けることによって、個々で学習した内容の共有化を図るだけでなく、授業時間外でも児童が気軽に学習に参加できる場の設定をした。

#### ③信頼し高め合うことができる学習集団や関係性を旨とするための意識の醸成

図1の外枠には、学習意欲の形成を促す環境的な条件として児童が所属する学習集団が安心感や居場所感のある学習環境が重要であることを示した。実践では、他者に配慮したよりよいやりとりを行う視点としてコミュニケーションポイントを提示したり、単元末の発表で他者のよいと思ったところを伝え合う活動を行い、自分の学習に対する自信をもつとともに、他者から認められている感覚がもてるようにした。

#### ④全員が学習に参加できるような個別的な支援

事前アンケートやワークシートの記述内容の確認や授業中での行動観察を通して個への支援を検討・実践し、児童のニーズや実態に沿ったきめ細やかな指導ができるようにした。実践では発表原稿を作成する際、自分が使用するワークシートを自己選択させたり、使えそうな表現を Our dictionary から引用して掲示したりすることで、書くことへの苦手意識を軽減できるようにした。

#### ⑤知的好奇心を刺激する学習環境の工夫

③と同様に学習意欲の形成を促す環境的な条件として、学習内容に興味をもつことができるような効果的な学習環境であることを示した。実践では授業の見通しや内容に対する興味を湧かせられるように学校図書館と連携して英語コーナーを設置し、学習内容に関連する図書や資料を掲示して授業外でも学習内容に触れられる機会があるようにした。

#### 4. 実践の考察

以下では、本単元で行った主な手立てに焦点を当てて考察していく。先に述べた5つの手立てのうち④と⑤については項目立てて考察することはしないが、授業後に個々の児童のワークシートの記述内容を毎時記録し、各児童の学習状況や必要な支援について予測を立てて授業を行った。さらに、掲示物の内容を児童の興味に合わせて変えたり、必要となる資料を置いたりすることにも努めた。最終的に全員が原稿を記述し発表することができていたことから、児童が学習意欲をもち続けながら学習をすることができたのではないかと考える。

##### (1) 単元振り返りシートの考察

単元振り返りシートの記述内容がどのように変化しているのかに着目して児童A、Bの記述を考察したところ、2人とも共通して第4時以降から前時の目標を意識した学習を行おうとする記述が増えてきていることが読み取れた。児童Aの第6時の記述には、他者の発表態度から自身の学習モデルを発見し、それに向かおうとする目標設定をしている内容がみられたことから、他者の学習状況から自身の学習方法を見直し、自分が今後どのような姿になりたいのかという自己決定ができており、学習意欲が刺激されていると考えられる。

児童Bの記述の第3時の目標と第4時の自己評価とのつながりに着目すると、第3時終了時に立てた目標が達成できなかったという。その原因は、第4時の学習活動が児童Bの目標設定に適した内容ではなかったと考えられたことから、学習意欲をより高められるようにするためには、個々の児童が掲げた学習目標の達成に適した学習活動を設定する必要があるがあった。

##### (2) 個としての学びと協働的な学びの考察

第4時で児童が作成した英文の発表原稿と第2時から第4時に作成した My dictionary の記述をもとに考察した。児童Cの発表原稿と My dictionary を見比べると、My dictionary から3つの単語を引用しており、発表原稿を書く際に My dictionary が有効だったと考えられる。さらに、My dictionary に書かれていなかった単語も使用していたことから、児童Cはその単語を Our dictionary や教科書などから探して使用したと考えられる。このことから、自分が知りたい英単語を個人で調べることは、小学校で学習する知識の幅を広げ、児童が表現したいと思う理想的な文を作成するのに非常に効果的であることがわかった。さらに、個人で調べたことを共有化することで、知識量や表現の幅が広がり、相互に学びを深め合うことが可能であることがわかった。

単元終了時に行ったアンケートでも、My dictionary や Our dictionary の活動を通して「もっと学習してみたい」と前向きな反応を示したのは79.3%であり、英語学習に対する意欲を刺激するのに有効な方法であったと考えられる。

##### (3) 学習集団としての意識の向上の考察

児童が聞き取りシートを記入する際にどこに着目したのかについて考察するために、第6時の聞き取りシートに書かれた友達の良かったところを、記述回数が多い項目ごとに整理してその傾向を

考察した。児童の記述内容から、表情、目線、声の大きさや高さや聞き取りやすさといった発音、ジェスチャーを交えて発表していることや聞き手に配慮した話し方、プレゼンテーションの内容に関する5つの項目に分類でき、その中でコミュニケーションポイントの中に合ったものが3つで記述回数も多く見られたことから、コミュニケーションポイントが発表をするときや、聞くときの観点として機能していたことが明らかとなった。

単元終了時に行ったアンケートでも、相手を意識したコミュニケーションができていく（「とてもできていく」「できていく」）と回答した児童の割合は授業前の65.6%から82.7%に増加した。また、第6時に行った互いによかったところを伝え合う活動を通して、自分の学習に活かそうとした児童は全体の8割を超えており、個で学びを完結するのではなく、児童同士でよりよい学びをしていこうとする積極的な姿が読み取ることができた。さらに、その活動を通して自分の発表に自信をもつことができたという回答したのは65.5%であり、学習意欲の構成要素である有能感の育成に機能したと考えられる。

## 5. 実践の成果と課題

本研究では、個と協働的な学びのつながりを図ることで、個々の児童の学習意欲だけでなく学習集団全体としての意識の向上に着目した学習展開を行ってきた。My dictionary と Our dictionary の接続は児童の知識量を増やすだけでなく、英語学習に対する興味をさらに高めることに有効であった。児童の実態を把握し、ニーズに合わせた支援をしながら個と協働的な学びの授業を行っていくことは、個としての学びを深めるだけでなく、そこに所属する児童全体の学習に対する興味関心や意識を高めていくことにつながったと考えられる。また、単元振り返りシートを使用したことで、見通しがもちやすくなったり、メタ認知を高め自分の学習に活かしたりすることに効果があった。さらに、他者から自分の発表に対する感想を伝え合う活動を通して、自分の発表を客観視でき、振り返りに記入した目標に対する達成度や課題点を明確にすることに有効であったと考えられた。そのため、振り返りをするにおいても、個と協働で確認し合うことが振り返りの内容をより妥当性のあるものにしたのではないかと考えた。しかし、今回の実践では子ども達一人ひとりが能動的に取り組む時間が十分であるか確かめられなかったため、児童にとっての活動のやりやすさや、次時の活動が前時の振り返りに掲げた目標に対して達成できるような内容になっているかなど、実態に沿った活動を行っていくことが課題であった。さらに、今回の実践を通して共に学び合う仲間との関係性の在り方や学習環境が児童の学習意欲を高めることに大きく影響していることを確かめることができた。コミュニケーションを視点にしながら他者意識を高めたり、お互いのよいところを伝え合ったりすることは、学習に対する自信をもつきっかけになったり、温かな学習環境の形成をする上で重要である子ども達同士の人間関係をより強くすることへつながったのではないかと考える。

注

- 1) 中央教育審議会. 2021 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）～』
- 2) 鈴木諒香「一人ひとりの学びを活かす子ども理解に基づく授業づくり」、『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）年報』第6号、(2022, 3月)
- 3) 櫻井茂男『自律的な学習意欲の心理学—自ら学ぶことは、こんなに素晴らしい—』, (誠信書房, 2017), pp. 2-3.
- 4) 櫻井茂男『学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる—』, (誠信書房, 2007), p. 19.
- 5) 櫻井茂男, 前掲書3), p. 26.
- 6) 秋田喜代美 坂本篤史 『心理学入門コース3 学校教育と学習の心理学』, (岩波書店, 2015), p. 89.